九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

友人関係における妄想的観念とネガティブな反すう，ストレス反応との関連

西村，彩
甘木心療クリニック

田嶌，誠一
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/26134

出版情報：九州大学心理学研究. 14, pp.49-57, 2013-03-01. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2013, Vol.14, 49-57

友人関係における妄想的観念とネガティブな反すう，ストレス反応との関連

西村　　彩　　甘木心療クリニック
田嶌　誠一　　九州大学大学院人間環境学研究院

Associations among paranoid ideation of friendship in adolescence, negative rumination, and stress responses

Aya Nishimura（*Amagi Psychosomatic Medicine Clinic*）
Seiichi Tajima（*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*）

This questionnaire survey study among 164 university students aimed to examine the types of paranoid ideation about friendship in adolescence. Subjects were divided into four groups on the basis of their scores on persecution, belittlement, other-harming, and alienation（Delusional Ideation Check-List; Tanno et al., 2000）: high paranoid ideation scores;, high alienation scores;, medium paranoid ideation scores;, and low belittlement, other-harming, and alienation scores. The paranoid ideation scores of the four groups suggested differences between subjective experience and scores. Trends in the three paranoid ideation scores suggested qualitative differences between persecution, belittlement, other-harming, and alienation. The study also examined the associations among the four groups in terms of negative rumination and stress responses. In people with lower levels of rumination, stress responses were related to paranoid ideation; in people with higher levels of rumination, to the type and frequency of paranoid ideation, particularly the frequency of persecution.

Key Words: paranoid ideation, adolescence, friendship, negative rumination

Ⅰ　問題と目的

青年期は，自分に対する意識が強まり，自分自身を客観的に眺めたり自らの言動を振り返ったりする時期だと言われている（伊藤，2006）。竹内（1987）は，青年たちが，特定の友人関係の中で，友人の自分に対する反応，態度に照らして，自己を見つめ直すことを指摘しており，青年期において友人の存在は自己確立をしていく上で重要になってくると言える。一方，高垣（1998）は，友人から「見捨てられる不安」から，自分の居場所を確保するために一生懸命周りに合わせないといけないと思っている青年がいることを報告している。また，松田（2008）は青年期の友人に対する不安感情について調査を行い，不安感情には「拒否不安」,「不調和不安」,「疎外不安」があることを明らかにしている。そして「友人を傷つけているのではないかという不安」があるのではないかと述べている。このように，友人の言動に対して敏感になるために，不安感情が高まることも考えられる。

他者への意識の仕方が病理性をおびたものの一つに妄想的観念が挙げられる。妄想的観念の位置づけに関しては様々な意見があるが，Strauss（1969）が妄想と普通の信念はスペクトラム上にあることを指摘して以来，妄想，妄想的観念，普通の信念は連続線上にあることが多くの研究で実証されてきた（Fenigstein & Vanable, 1992；Van Os et al.，2000 など）。DSM-Ⅳ-TR（American Psychiatric Association，2000/2004）では，「妄想様観念」という用語が用いられており，「妄想ほどの強さはない観念で，自分が苦しめられている，迫害されている，また不当に扱われているという疑念」と定義されている。

Fenigstein（1984）は，自分に向けられたものとは限らない出来事に対して，自分が被害者であると過剰に判断してしまうことを「overperception of self as a target」とし，Fenigstein & Vanable（1992）は被害観念を捉えるパラノイア尺度を作成している。それ以後，日常性を重視した金子（1999）の被害妄想的心性尺度，多様な側面からの検討を重視した Freeman et al.（2005）の Paranoia Checklist，妄想的観念と妄想の連続性を重視し，両方を捉えた Peters et al.（1999）の Peters et al. Delusional Inventory（以下，PDI と略記）など様々な尺度が開発されてきた。しかし，これらの尺度は，妄想との弁別の視点から，確信度，訂正可能性，内容の正誤などの多次元的に妄想的観念を捉えることを重視しており，妄想的観念の主題に関してはあまり扱ってきていなかった。それを踏まえ，丹野ら（2000）は，妄想的観念の主題を包括的に捉える妄想観念チェックリストを作成し，負感情項目として，疎外観念，微小観念，被害観念，加害観念，正感情項目として，庇護観念，自己肯定観念，被好意観念，他者操作観念があることを明らかにしている。

妄想的観念に関連する要因としては，自己意識や他者

意識（金子，1999，2000など），性格特性（山内ら，2008など），原因帰属スタイル（森本ら，2002など）などが検討されてきている。しかし，妄想的観念の内容との関連を見た研究は少ない。丹野ら（2000）は，健常大学生を対象に，上記の8種類の妄想的観念の体験頻度を調査している。そして，中でも「周りの人から疎まれたり嫌がられたりしているのではないか」といった疎外観念，「まったくひとりぼっちで居場所がない」といった微小観念，「知らない間に他の人の心を傷つけているのではないか」といった加害観念は9割以上が経験していることを示している。このように，妄想的観念の種類によって体験頻度が異なることから，妄想的観念の内容によって体験のあり方に違いが生じる可能性が考えられる。また，複数の妄想的観念の体験頻度が高いことより，一人が複数の妄想的観念を体験している場合も予測される。従って，複数の妄想的観念の体験のあり方に着目することは意義あると言える。さらに，丹野ら（2000）の研究は一般的他者に対する妄想的観念について調査したものである。しかし，青年期の特徴を踏まえると，青年期において，友人の言動に敏感になった結果，妄想的観念を体験する可能性も考えられる。従って，本研究では青年期の友人関係における妄想的観念に着目し，妄想的観念の種類，複数の妄想的観念の体験のあり方を明らかにする。

また，妄想的観念が思考の質だとすると，思考の仕方として“反すう”という概念がある。反すうは，主に海外で研究が積み重ねられてきており（Martin & Tesser, 1989；Nolen-Hoeksema，1991など），近年日本でも盛んに研究が行われるようになってきている（名倉・橋本，1999a；伊藤・上里，2001など）。妄想的観念と反すうの関連を検討したものとしては，津田（2009）の研究がある。津田（2009）は，情報を補完するための反すうの結果として関係妄想的認知が生まれるという仮説に基づき，フィードバック要求スキル，フィードバック猜疑心，反すう傾向と，被害妄想的観念を捉える「自己関連付け」（金子，2000）との関連を調べている。そして「情報が制限されたあいまいな状況において，フィードバック要求スキルが低い個人は不十分な手がかりしか得られないと知覚するため，得られた手がかりを反すうする傾向が高く，その反すう傾向が自己とは直接関係しない周囲の出来事を自己に関連づけてしまう傾向，すなわち関係妄想的認知と結びつく」というメカニズムを明らかにしている。このように，津田（2009）の研究は被害妄想的観念が生じるまでの過程に反すうが関連していることを示したものである。しかし，名倉・橋本（1999b）は，否定的反すうが精神的健康に影響を及ぼすことを示しており，被害妄想的観念を体験した後に，被害妄想的観念について反すうすることで精神的健康の低下につながることも考えられる。また，津田（2009）の研究は，被害妄想的観念に限定したものである。従って，被害妄想的観念に限らない幅広い妄想的観念との関連を見ていくことや，妄想的観念と反すうと精神的健康との関連を検討することには意義があると言える。

以上のことから，本研究では，分析1において，一般大学生を対象に作成された丹野ら（2000）の妄想観念チェックリストの負感情項目を援用し，青年期の友人関係における妄想的観念にはどのような種類があるのか，青年たちの妄想的観念の体験のあり方にはどのようなタイプがあるのかについて調査する。次に分析2において，妄想的観念の体験のあり方と反すう，ストレス反応の関連を検討する。なお，本研究は妄想的観念の研究であるため，反すうの中でもネガティブな事柄全般を扱っている伊藤・上里（2001）のネガティブな反すうを用いる。また，精神的健康の指標として，ストレス反応を用いることにする。

Ⅱ　方　　法

1. 調査対象

地方国立A大学，B大学の大学生170名，うち有効回答164名（男性：70名，女性：94名，平均年齢：19.85歳）

2. 調査時期・方法

2010年7月上旬，2011年4月に無記名の個別記入形式の質問紙調査を実施した。

3. 調査材料

1）友人関係における妄想的観念に関する項目

友人関係における妄想的観念を測るものとして，丹野ら（2000）の妄想観念チェックリストの負感情項目を用いた。本研究は，“現在最も交流のある親しい友人（友人たち）”への妄想的観念を測ることを目的としているため，丹野ら（2000）の項目の「周りの人」など一般的な他者の表現を「友人」と変更した。また，項目の表現を一貫させるため，語尾を「という考え」または「という体験」に統一した。項目の表現の検討は，筆者を含む臨床心理学を専攻する大学院生3名で行った。

教示は「現在，友人と関わる際に，友人の何気ない言葉や行動から，以下のような考えが起こることがどのくらいありますか。最も当てはまるものに○をつけて下さい。なお，友人＝現在最も交流がある親しい人（人たち）とします。」とし，先行研究にならい，「全くない」～「よくある」の3件法で尋ねた。

2）ネガティブな反すう尺度（伊藤・上里，2001）

項目数は全14項目で，「ネガティブな反すう傾向」，

「ネガティブな反すうコントロール不可能性」の2因子から成る。本研究では14項目のうち，伊藤・上里の後の研究（2002など）と同様にダミー項目3項目を除いた11項目を用いた。「当てはまらない」～「当てはまる」の6件法で回答を求めた。

3）ストレス反応尺度（尾関，1993）

項目数は全35項目で，情動的反応（15項目），認知・行動的反応（10項目），身体的反応（10項目）から成る。「当てはまらない」～「当てはまる」の4件法で回答を求めた。

Ⅲ　分析1

1．結果

1）友人関係における妄想的観念に関する項目の検討

前述の手続きで作成された24項目に対して，「全くない」に1点～「よくある」に3点を付与し，重み付けのない最小二乗法，*Promax* 回転による因子分析を行った。その結果，固有値1以上，因子の解釈可能性から，3因子構造が妥当と判断された。共通性，因子負荷量を考慮して4項目を削除し，最終的に3因子20項目を採用した。それぞれ「被害観念」因子，「微小・加害観念」因子，「疎外観念」因子と命名した。各因子の *Cronbach* の α 係数と3つの因子の間の相関はTable 1に示す。

2）友人関係における妄想的観念の体験のあり方の類型化

青年期の友人関係における妄想的観念の体験のあり方を類型化するために，上記の各因子の標準化得点に基づいて，クラスター分析（平方ユークリッド距離，Ward法）を行った。その結果，4つのクラスターに分類することが妥当であると判断された。各クラスターの特徴を明らかにするために，クラスターを独立変数，被害観念因子，微小・加害観念因子，疎外観念因子の各因子の合計得点を従属変数とする1要因分散分析を行った。その結果，どの分析においてもクラスターの主効果は有意であった（被害観念因子：$F_{(3,160)}=94.75$, $p<.01$，微小・加害観念因子：$F_{(3,160)}=70.33$, $p<.01$，疎外観念因子：$F_{(3,160)}=91.64$, $p<.01$）。多重比較を行ったところ，被害観念因子は，第3クラスターの方が，第1クラスター，第2ク

Table 1
友人関係における妄想的観念に関する項目の因子分析（*N*=164）

NO.	項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	共通性
	Ⅰ．被害観念（α = .85）				
14	友人が私をワナにかけようとしているのではないかという考え	.76	− .16	.17	.62
17	友人が私を陥れようとして狙っているように感じられる体験	.74	− .17	.13	.56
15	私は友人に利用されているのではないかという考え	.71	.07	.06	.60
16	友人に操られているように感じられる体験	.69	− .07	.03	.45
12	私の考えていることが、友人に知られているのではないかという考え	.65	.24	− .22	.50
13	私の考えていることが、友人から読まれているのではないかという考え	.54	.32	− .21	.42
18	友人が私の行動を邪魔しているのではないかという考え	.49	− .02	.22	.37
	Ⅱ．微小・加害観念（α = .83）				
21	友人に迷惑をかけているのではないかという考え	− .06	.73	.01	.51
20	知らない間に、友人を傷つけることを言っているのではないかという考え	− .06	.71	.01	.48
10	友人はみんな持っているのに、自分だけ何かの能力が欠けているのではないかという考え	− .11	.66	.15	.47
19	知らない間に、友人を侮辱しているのではないかという考え	− .02	.58	.02	.35
9	友人より容姿（顔や体型）が劣っているのではないかという考え	.02	.57	.16	.42
11	友人より仕事や勉強の能力が低いのではないかという考え	.04	.52	.07	.32
23	知らない間に、友人の人生をダメにしているのではないかという考え	.19	.43	− .08	.26
22	友人に取り返しのつかない重い罪を犯してしまったのではないかという考え	.32	.41	− .09	.34
	Ⅲ．疎外観念（α = .83）				
3	私のいないところで、友人が私をけなしているのではないかという考え	− .06	.05	.85	.71
2	友人が私を見て、ばかにしているように感じられる体験	.13	− .12	.69	.50
4	友人から“のけもの”にされているのではないかという考え	− .02	.16	.65	.52
1	友人から疎まれたり嫌がられたりしているのではないかという考え	− .04	.27	.53	.45
5	友人の話し声が、私の悪口を言っているように聞こえた体験	.24	.03	.51	.44
	因子間相関　Ⅰ	−	.44	.45	
	Ⅱ	−	−	.46	

ラスター，第４クラスターよりも有意に高かった。また，第１クラスターの方が，第２クラスター，第４クラスターよりも有意に高いことも示された。第２クラスターと第４クラスターの間には有意な差は見られなかった（*MSe*=.37, *p*<.01）。

微小・加害観念因子においては，第３クラスターの方が，第１クラスター，第２クラスター，第４クラスターよりも有意に高いこと，第１クラスターの方が，第２クラスター，第４クラスターよりも有意に高いこと，第２クラスターの方が第４クラスターよりも有意に高いことが示された（*MSe*=.44, *p*<.01）。

疎外観念因子に関しては，第３クラスターの方が，第２クラスター，第４クラスターよりも有意に高いこと，第１クラスターの方が，第２クラスター，第４クラスターよりも有意に高いこと，第２クラスターの方が第４クラスターよりも有意に高いことが分かった。しかし，第３クラスターと第１クラスターの間には有意な差は見られなかった（*MSe*=.38, *p*<.01）。（Fig.1，Table２参照）

第１クラスターは，微小・加害観念，疎外観念の体験頻度は中程度だが，疎外観念は第３クラスターと変わらず高い頻度で体験している群である。従って，疎外観念優位群と命名する。第２クラスターは，全ての妄想的観念を中くらいの頻度で体験している群である。従って，全妄想的観念中群と命名する。第３クラスターは，全ての妄想的観念を高い頻度で体験している群である。従って，全妄想的観念高群と命名する。第４クラスターは，被害観念は第２クラスターと同程度に体験しているが，他をほとんど体験していない群である。従って，微小・加害・疎外観念低群と命名する。

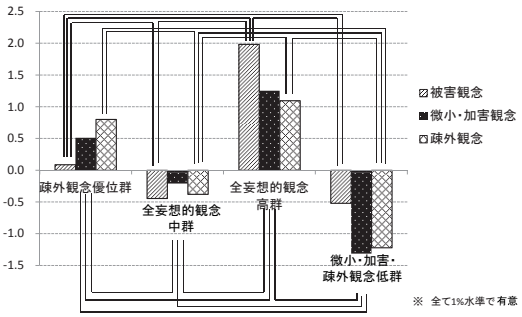

Fig.1　友人関係における妄想的観念の体験のクラスター分析の結果

2. 考察

1）友人関係における妄想的観念の因子構造

丹野ら（2000）の研究では，第１因子が疎外観念，微小観念の２つに分かれ，第２因子が被害観念，第３因子が加害観念となっていた。しかし，本研究では，各観念の項目内容は共通しているが，疎外観念が単独因子となり，微小観念と加害観念がまとまった。本研究は妄想的観念を抱く対象を友人に限定している。従って，一般的な他者との関係においては，疎外観念と微小観念が共通の要素を持つのに対して，友人関係においては，加害観念と微小観念が共通の要素を持つことが考えられる。

項目内容を見ると，微小観念の項目は，自身を過小評価し，つまらない人間だと考える内容であり，加害観念の項目は，自身が友人を害し，迷惑をかける人間だと考える内容であり，疎外観念の項目は，自分は友人からのけものにされ，ばかにされていると考える内容だと言える。従って，加害観念と微小観念が同一の因子になったことから，自分が友人に迷惑をかけているのではないかという考えと，自分はつまらない人間，価値の低い人間であるという考えは強い関連があると考えられる。罪悪感の研究において，Vangelist et al.（1991）は，罪悪感は親密な対人関係の文脈において誘発されるが，見知らぬ他者との文脈では喚起されないことを指摘しており，薊（2010）は，重要で親密な他者によって叱責されると罪悪感が喚起されることを明らかにしている。つまり，対象との関係性によって，行動の意味づけ方や，行動の結果の受け取り方が異なる可能性がある。自身にとって友

Table 2
クラスターによる各妄想的観念の頻度の差の検定の結果（標準化得点）

クラスター	疎外観念優位群 (*N*=45)	全妄想的観念中群 (*N*=72)	全妄想的観念高群 (*N*=21)	微小・加害・疎外観念低群 (*N*=26)	*F* 値
被害観念	.09 (.69)	− .44 (.43)	1.98 (1.03)	− .52 (.37)	94.75**
微小・加害観念	5.12 (.81)	− .21 (.59)	1.25 (.79)	− 1.31 (.42)	70.33**
疎外観念	.80 (.52)	− .38 (.60)	1.09 (1.03)	− 1.21 (.22)	91.64**

**p<.01
（　）内は標準偏差

人が特別な存在であるからこそ，迷惑をかけることに対する申し訳ない気持ちが高まり，一般的他者に同様のことをする以上に，自己評価の低下をまねくことが考えられる。

次に，因子間の相関を見たところ，全ての因子の間で中程度の相関があることが示された。因子として分かれているが，共通した要素を持ち，1つの妄想的観念を体験すると，他の妄想的観念も体験しやすいと考えられる。項目内容を見ると，被害観念と疎外観念は友人から害を受けるという意味で共通しているが，被害観念の方が疎外観念よりも害が直接的で，程度が大きいと思われる。また，被害観念，疎外観念と加害観念では，友人から自身へ向けられたものか，自身から友人へ向けられたものかといった害が与えられる方向性が異なると言える。因子間で相関があることより，妄想的観念は程度や方向性が移ろいやすい可能性が考えられる。

2）妄想的観念の体験のあり方

クラスター分析の結果，妄想的観念の体験のあり方には4つのタイプがあることが明らかになった。被害観念，疎外観念の体験を特徴とする群は抽出されたが，微小・加害観念の体験が優位である群は見いだされなかった。従って，微小・加害観念だけを体験している者は群を形成できる程には存在せず，微小・加害観念を体験している者は，被害観念または疎外観念をある程度体験していると言える。因子間相関が高い点を踏まえると，自分が友人を不快にさせているのではないかという考えは，友人が自分を不快に思っているのではないかという考えに移行しやすく，相乗効果で体験頻度が高まる可能性が考えられる。

次に，各クラスターの被害観念，微小・加害観念，疎外観念の得点の差について考察する。まず，全妄想的観念高群と疎外観念優位群を比較すると，疎外観念の体験頻度は変わらないが，被害観念，微小・加害観念の体験頻度には差がある。特に，被害観念に関しては，全妄想的観念高群は他の観念に比べて高頻度で体験しているのに対して，疎外観念優位群は最も体験頻度が低い。つまり，個人の中での3つの妄想的観念の体験バランスに違いがあることが分かる。全妄想的観念高群は，様々な妄想的観念を体感しながらも被害観念を強く感じる可能性があり，疎外観念優位群は，微小・加害観念，被害観念も体験しているが，疎外観念の感覚が表に出やすい可能性が考えられる。また，全妄想的観念高群と微小・加害・疎外観念低群との違いを見ると，体験バランスは共通しているが，頻度に大きな違いがあることが分かる。つまり，被害観念を相対的に強く感じるという点は共通しているが，全妄想的観念高群が他の妄想的観念も体験しているのに対して，微小・加害・疎外観念低群は，被害観念を除いてほとんど体験していないと言える。また，疎外観念優位群と微小・加害・疎外観念低群を比較すると，疎外観念優位群は3つの妄想的観念の中で疎外観念を高く体験しているのに対して，微小・加害・疎外観念低群は被害観念のみ体験しており，頻度と体験バランスの両方で違いがあると言える。

次に，全妄想的観念中群に着目する。全妄想的観念中群と全妄想的観念高群，疎外観念優位群を比較すると，頻度，体験バランスの両方で違いがあることが分かる。全妄想的観念高群や疎外観念優位群は，全妄想的観念中群に比べて，全ての妄想的観念の体験頻度が高く，3つの妄想的観念の中に特に体験頻度が高い妄想的観念を持っている。一方，全妄想的観念中群は，3つの妄想的観念の体験に大きな差は見られない。また，全妄想的観念中群と微小・加害・疎外観念低群を比較すると，被害観念の体験頻度は変わらないが，微小・加害観念，疎外観念の体験頻度に差があるため，体験バランスに違いが生じていることが窺われる。つまり，全妄想的観念中群は，全般的に妄想的観念を体験しているが，どれかが際立つことはなく，微小・加害・疎外観念低群は，他の妄想的観念をほとんど体験していない代わりに，被害観念を自覚しやすいことが予測される。

このように，3つの妄想的観念の体験バランスの違いから，妄想的観念の体感が異なる可能性が示唆された。従って，妄想的観念の体験が語られる場合，高頻度で体験しているものが特に語られ，相対的に頻度は高くないものの，実際には体験している妄想的観念があまり語られない可能性が考えられる。臨床場面で考えると，語られる内容だけに着目していると，語られていない部分の妄想的観念の体験の影響を見落としてしまうおそれがある。そのため，妄想的観念の体験のあり方にはいくつかタイプがあることが明らかになったことは臨床的にも意義があると言える。

次に，被害観念，微小・加害観念，疎外観念の得点について考察する。被害観念は，体験頻度が大変高い群，やや高い群，中くらいの群に分かれたのに対して，微小・加害観念と疎外観念は，高い群，やや高い群，中くらいの群，低い群に分かれた。被害観念の体験のあり方が少し極端であるに対して，微小・加害観念や疎外観念の体験のあり方には幅があることが窺われる。このことより，被害観念と，微小・加害観念，疎外観念では捉えようとしているものの質が異なる可能性が考えられる。丹野ら（2000）の研究において，各妄想的観念の体験頻度を調査した結果，疎外観念，微小観念，加害観念は9割以上の大学生が体験しているのに対して，被害観念は7割であった。また，精神科医が他の疾患と比較して統合失調症の診断において重視するものとして，被害観念と疎外観念があることを示している。これらのことよ

り，被害観念は，統合失調症の病理を反映した内容であり，健常者では他の妄想的観念に比べて体験頻度が下がると考えられる。妄想と普通の信念のスペクトラムで考えると，被害観念は妄想に近いものであり，疎外観念，微小観念，加害観念は普通の信念に近いものである可能性が窺われる。疎外観念，微小観念，加害観念は日常に体験されやすいものであるため，体験のあり方に幅が生じたのではないかと思われる。しかし，本研究では質的違いの分析に限界があるため，更なる検討が必要だと考える。

最後に，先行研究において被害妄想的観念として捉えられてきたものと本研究や丹野ら（2000）で捉えている被害観念の違いについて言及したい。従来の研究において被害妄想的観念は，パラノイア尺度の項目（森本，2008），PDI の一部の項目（山内ら，2008），Paranoia Checklist の項目（山内ら，2007，2009），パラノイア尺度の項目に日常生活の疑心暗鬼の意識を含む項目を加えた「被害妄想的心性」（金子，1999；津田，2009）で捉えられてきている。例えばパラノイア尺度（丹野ら，1999）は，「理由もないのによくひどい目にあわされていると思う」，「ときどき誰かにつけられているように感じる」などの項目であり，Paranoia Checklist（山内ら，2007）は「他人が私に対して敵意を抱いているだろう」，「私は陰で悪口を言われている」，「私に対する陰謀があるかもしれない」などの項目である。丹野ら（2000）や本研究における被害観念と疎外観念が合わさったものが被害妄想的観念と呼ばれ，研究が行われてきたと推測される。しかし，被害観念と疎外観念は別の因子をなし，群の分かれ方より質が異なることが示唆された。従って，被害観念と疎外観念を分けて研究を行っている点に本研究の独自性があると言える。

Ⅳ　分析２

1. 結果

最初に，ネガティブな反すう尺度の合計得点の中央値で群わけを行い，中央値未満をネガティブな反すう低群，中央値以上をネガティブな反すう高群とした。次に，分析１で作成した妄想的観念のクラスターとネガティブな反すうを独立変数，ストレス反応を従属変数とする２要因（4×2）分散分析を行った。その結果，交互作用が有意であった（$F_{(3,156)}$=2.63, p<.05）。また，妄想的観念のクラスターとネガティブな反すうの主効果も有意だった（妄想的観念のクラスター：$F_{(3,156)}$=16.85, p<.01，ネガティブな反すう：$F_{(1,156)}$=21.00, p<.01）。（Table 3 参照）

妄想的観念の単純主効果を検定したところ，ネガティブな反すう低群において，全妄想的観念高群が微小・加害・疎外観念低群よりもストレス反応が有意に高いことが示された。また，ネガティブな反すう高群においては，全妄想的観念高群が他の３群よりも，疎外観念優位群が全妄想的観念中群，微小・加害・疎外観念低群よりもストレス反応が有意に高いことが分かった。全妄想的観念中群と微小・加害・疎外観念低群の間では有意な差は見られなかった。（ネガティブな反すう低群：$F_{(3,156)}$=4.23, p<.01，ネガティブな反すう高群：$F_{(3,156)}$=16.13, p<.01）次に，ネガティブな反すうの単純主効果を検定したところ，疎外観念優位群と全妄想的観念高群において，ネガティブな反すう高群の方が低群よりもストレス反応が有意に高いことが示された（疎外観念優位群：$F_{(1,156)}$=12.39, p<.01，全妄想的観念高群：$F_{(1,156)}$=11.91, p<.01）。（Fig.2 参照）

2. 考察

ネガティブな事柄について考え続ける傾向が低い場合，全妄想的観念高群は，微小・加害・疎外観念低群よりもストレス反応が高いことが分かった。全妄想的観念高群と微小・加害・疎外観念低群は，３つの妄想的観念の体験のバランスは一緒であるが，全体的な体験の頻度が異なる群である。また，微小・加害・疎外観念低群と被害観念の体験頻度は同じであるが，微小・加害観念，疎外観念も中程度に体験しているものに全妄想的観念中群がある。全妄想的観念中群は，全妄想的観念高群との間でストレス反応に違いは見られなかった。これらの結果を総合すると，ネガティブな事柄について考え続ける

Table 3
妄想的観念のあり方とネガティブな反すうとストレス反応の関連についての分散分析の結果

妄想的観念	疎外観念優位群		全妄想的観念中群		全妄想的観念高群		微小・加害・疎外観念低群			
ネガティブな反すう	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群		
	(N=30)	(N=15)	(N=19)	(N=53)	(N=13)	(N=8)	(N=9)	(N=17)		F 値
ストレス反応	73.87	55.87	60.63	55.58	94.08	69.00	51.44	44.94	A：妄想的観念の主効果	16.85 **
									B：ネガティブな反すうの主効果	21.00 **
	(18.99)	(15.15)	(15.68)	(16.04)	(17.53)	(12.31)	(16.64)	(12.14)	A×B の交互作用	2.63 *

**p<.01, *p<.05
（　）内は標準偏差

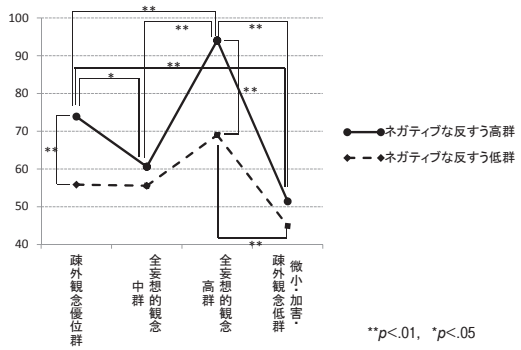

Fig.2　妄想的観念のあり方とネガティブな反すうとストレス反応の関連

傾向が低い場合，妄想的観念の体験の種類や頻度というよりは，妄想的観念の体験自体がストレス反応に関連すると考えられる。金子ら（2003）は，出来事を被害的に自己に結びつける傾向と抑うつ感情に正の相関があることを示している。従って，考え込む傾向が低い場合であっても，妄想的観念を持つこと自体が，精神的健康を阻害すると考えられる。

ネガティブな事柄について考え続ける傾向が高い場合，全妄想的観念高群が最もストレス反応が高く，次いで疎外観念優位群が高く，そして全妄想的観念中群と微小・加害・疎外観念低群が同程度にストレス反応を示すことが分かった。これらの結果より，被害観念の体験頻度が低下することによってストレス反応が低下すると考えられる。また，微小・加害観念と疎外観念は，よく体験している者と時々体験している者ではストレス反応に差があるが，時々体験している者とほとんど体験していない者では差が見られない。従って，微小・加害観念と疎外観念は，一定の体験頻度を超えた場合にストレス反応に関連してくると考えられる。以上のことより，ネガティブな事柄について考え続ける傾向が高い場合，妄想的観念の頻度と種類の２つがストレス反応に関連してくると言える。

では，体験頻度と種類に分けて考察を試みる。まず，頻度に関してだが，少しでも妄想的観念を体験していると，考え込むことによって，妄想的観念の内容がネガティブな方向に深まったり，苦痛な度合いが高まったりする可能性が考えられる。例えば，Nolen-Hoeksema & Morrow（1991）は地震にあった後に，地震について繰り返し考え続けた者が，抑うつ気分やストレスが高まったことを報告し，Segerstrom et al.（2000）は，大学生の調査で，繰り返し思考は不安や抑うつと正の相関があることを示している。また，松本（2010）は，ネガティブな内省によって，抑うつ感が高まることを明らかにしている。このように，反すうにはネガティブな気分を増幅する作用があると考えられる。従って，本研究の妄想的観念の体験においても，先行研究と同様の結果が出たと言える。

次に，妄想的観念の種類についてだが，分析１における結果・考察を踏まえると，被害観念は，微小・加害観念や疎外観念と比較して，妄想に近く，病理性が高いことが窺われる。森本・丹野（2004）は，被害妄想的観念の特徴を庇護妄想的観念との比較によって捉えている。そして，被害妄想的観念は，抵抗感や違和感，心的占有度，中断不能性，証拠探しの得点が高いことを明らかにしている。従って，被害妄想的観念は，一度思い浮かべると，その考えで頭の中がいっぱいになり，切り替えが難しくなることや，思い浮かべることへの抵抗感や違和感が高まり，苦痛度も高まることが考えられる。つまり，被害観念を体験する頻度が少なくても，一度考え込むと頭の中が被害観念で占められ，切り替えも難しくなるため，ネガティブな考えも深まりやすく，苦痛も高まることが予測される。一方，微小・加害観念や疎外観念は，被害観念に比べて日常に近いものである。そのため，僅かな体験では影響はないが，体験頻度が一定限度を超えると考え込む頻度も多くなり，結果としてストレス反応が高まることが考えられる。

妄想的観念を全般的に高頻度で体験しつつ，被害観念の体験の度合いが高い者と，疎外観念を頻繁に体験している者は，考え込むことによってストレス反応が高まることが分かった。従って，ある程度の妄想的観念の体験をすると，考え込むことの影響が生じると考えられる。佐々木ら（2002）は，大学生を対象に調査を行い，妄想的観念の負感情項目全体と，「憂鬱になりやすい」，「自分がみじめな人間に思える」といった「情動性」に正の相関あることを示している。既に述べたように，反すうに妄想的観念による苦痛度の増幅作用があると仮定すると，妄想的観念の体験が頻回に起こるようになると「情動性」も高くなるため，反すうによって，ストレス反応が高くなることが考えられる。

Ⅴ　まとめと今後の課題

青年期の友人関係における妄想的観念の体験のあり方には４つのタイプがあることが分かった。複数の妄想的観念を体験する場合，各妄想的観念の体験頻度の違いより，特定の妄想的観念を強く感じるなど主観的体験に差が生じる可能性が示唆された。従って，臨床場面において妄想的観念の体験が語られる場合，語られる体験だけでなく，語られていない妄想的観念の影響も考慮しながら話を聴くことが重要だと言える。また，各妄想的観念の得点より，被害観念と微小・加害観念，疎外観念では，妄想と普通の信念のスペクトラムでの位置づけに違いが

あることが示唆された。従来の研究は，妄想的観念全般や被害妄想的観念に絞った研究が中心であった。しかし，本研究の結果より，先行研究の被害妄想的観念には，本研究の被害観念と疎外観念の２つが含まれており，被害観念を持つ人が必ずしも疎外観念を持つわけではなく，様々な体験のあり方があることが明らかになった。

妄想的観念の体験のあり方とネガティブな反すう，ストレス反応の関連の検討した結果，ネガティブな事柄について考え続ける傾向が低い場合，妄想的観念の種類や頻度に関係なく，妄想的観念の体験自体がストレス反応に関連することが示された。一方，ネガティブな事柄について考え続ける傾向が高い場合，妄想的観念の種類と頻度の２つがストレス反応に関連することが明らかになった。これは，反すうに妄想的観念の苦痛度を増幅させる作用があることや，被害観念の病理性が高いことが関係していると考えられる。以上より，妄想的観念によって精神的健康を害している青年を援助する場合，考え続けることから切り替えることや妄想的観念，特に被害観念の体験を軽減させることが重要になると言える。

本研究の課題は，まず，被験者の数が挙げられる。各群の特徴を検討する際に，分析上群の人数が不十分なものがあった。そのため，被験者数を増やし，再度検討していく必要がある。次に，各群の特徴をより明確するために，要因の検討を積み重ねていくことが挙げられる。本研究では，各群の特徴を，妄想的観念の体験のあり方とネガティブな反すう傾向で捉えるに留まっている。今後，パーソナリティ特性や自尊心など様々な要因との関連を見ていくことで，各群への援助の視点も見出しやすくなると考えられる。また，本研究では，因子分析の結果より，従来の被害妄想的観念は，病理の重さによって被害観念と疎外観念に分かれるのではないかという仮説を提示した。一方，加害観念は，病理の重さによる分類はしていない。人間関係の文脈で考えると，加害観念にも段階がある可能性がある。仮説を再検証すると共に，加害観念の内容を詳細に検討することも必要だと言える。

＜付記＞

本研究のご指導をいただきました九州大学大学院教授の福留留美先生，九州大学名誉教授，跡見学園女子大学教授の野島一彦先生に心よりお礼申し上げます。また，研究や調査にご助力いただきました方々，田嶌研究室のゼミ生の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

American Psychiatric Association.（2000）. *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision*. Washington D.C.: American Psychiatric Association. 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸（訳）（2004）. DAM-Ⅳ-TR　精神疾患の診断・統計マニュアル（新訂版）. 医学書院.

Fenigstein,A.（1984）. Self-consciousness and the overperception of self as a target. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 860-870.

Fenigstein A., & Vanable P.（1992）. Paranoia and self-consciousness. J*ournal of Personality and Social Psyachology*, **62**, 12-138.

Freeman,D., Garety,P.A., Bebbington,P.E., Smith,B., Rollinson,R., Fowler,D., Kuipers,E., Ray,K., & Dunn,G.（2005）. Psychological investigation of the structure of paranoia in a non-clinical population. *British Journal of Psychiatry*, **186**, 427-435.

伊藤美奈子（2006）. 1. 思春期・青年期の意味. 伊藤美奈子（編）. 朝倉心理学講座 16. 海保博之（監修）. 思春期・青年期臨床心理学. 朝倉書店, pp. 1-12

伊藤拓・上里一郎（2001）. ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討. カウンセリング研究, **34**, 31-42.

伊藤拓・上里一郎（2002）. ネガティブな反すうとうつ状態の関連性についての予測的研究. カウンセリング研究, **35**, 40-46.

金子一史（1999）. 被害妄想的心性と他者意識および自己意識との関連について. 性格心理学研究, **8**(1), 12-22.

金子一史（2000）. 青年期心性としての自己関係づけ. 教育心理学研究, **48**, 473-480.

薊理津子（2010）. 屈辱感, 羞恥感, 罪悪感の喚起要因としての他者の特徴. パーソナリティ研究, **18**(2), 85-95.

Martin,L.L., & Tesser,A.（1989）. Toward a motivational and structural theory of ruminative thought. In J.S. Uleman & J.A.Bargh（Eds.）. *Unintednded Thought*. New York：Guilford, pp. 306-326.

松田常美（2008）. 青年期における理想の友人関係と対友人不安感情が現実の友人関係に及ぼす影響. 甲南女子大学大学院論集　人間科学研究編, **6**, 49-65.

松本麻友子（2010）. 反すうが抑うつに及ぼす影響. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要　心理発達科学, **57**, 1-9.

森本幸子・丹野義彦・坂本真士・石垣琢磨（2002）. 被害妄想的観念の発生に関するストレス素因モデルの検討. 性格心理学研究, **11**(1), 2-11.

森本幸子・丹野義彦（2004）. 健常者の妄想的観念への多次元的アプローチ－被害妄想的観念と庇護妄想的観念の比較を通して－. 心理学研究, **74**(6), 552-555.

森本幸子（2008）．大学生における被害妄想的観念への対処方略について．心理学研究，**78**(6)，607-612.

名倉祥文・橋本宰（1999a）．考え込み型反応スタイルが心理的不適応に及ぼす影響について．健康心理学研究，**12**(2)，1-11.

名倉祥文・橋本宰（1999b）．反応スタイルと精神的不適応の関連性について．日本教育心理学会総会発表論文集，**41**，615.

Nolen-Hoeksema,S.（1991）．Responses to depression and their effects on the duration of depressive episodes. *Journal of Abnormal Psychology*，**100**，569-582.

Nolen-Hoeksema,S. & Morrow.J.（1991）．A prospective study of depression and distress following a natural disaster：The Roma Prieta earthquake. *Journal of Personality and Social Psychology*，**61**，115-121.

尾関友佳子（1993）．大学生用ストレス自己評価尺度の改訂－トランスアクショナルな分析に向けて－．久留米大学大学院比較文化研究科年報，1号，95-114.

Peters E.R., Joseph,S.A., & Garety,P.A.（1999）．Measurement of delusional ideation in the normal population: Introducing the PDI（Peters et al. Delusions Inventory）. *Schinopherenia Bulletin*，**25**，553-576.

佐々木淳・星野崇宏・丹野義彦（2002）．精神病理の症状と性格5因子モデルとの関係．教育心理学研究，**50**，65-72.

Strauss,J.（1969）．Haullucinations and delusions as points on continua function. *Archives of General Psychiatry*，**21**，581-586.

Suzanne C. Segerstrom, Jennie C.I.Tsao, Lynn E. Alden & Michelle G. Craske（2000）．Worry and Rumination：Repetitive Thought as a Concomitant and Predictor of Negative Mood. *Cognitive Therapy and Research*，**24**(6)，671-688.

高垣忠一郎（1998）．揺れる子どもの心の発達．かもがわ出版.

竹内常一（1987）．子どもの自分くずしと自分つくり．東京大学出版会.

丹野義彦・石垣琢磨・大勝裕子・杉浦義典（1999）．パラノイア尺度の信頼性．このはな心理臨床ジャーナル，**5**(1)，93-100.

丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義典（2000）．妄想的観念の主題を測定する尺度の作成．心理学研究，**71**(5)，379-386.

津田恭充（2009）．被害的な関係妄想的認知の生起メカニズムの検討－情報補完の観点から－．カウンセリング研究，**42**，22-29.

Vangelist,A.L., Daly,J.A. & Rudnick,J.R.（1991）．Making people feel guilty in conversations: Techniques and correlates. *Human Communication Research*，**18**，3-39.

Van Os,J., Hanssen,M., Bijl,R.V., & Ravelli,A.（2000）．Revisited: A psychosis continuum in the general population? *Schizophrenia Research*，**45**，11-20.

山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦（2007）．日本語版 Paranoia Checklist の作成および信頼性・妥当性の検討．パーソナリティ研究，**16**(1)，114-116.

山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦（2008）．被害妄想的観念と性格特性5因子モデルおよび帰属スタイルとの関連．カウンセリング研究，**41**，161-168.

山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦（2009）．日本語版パラノイア・チェックリストの因子構造および妥当性の検討．パーソナリティ研究，**17**(2)，182-193.